

なぜ奴隸の学問か

——わが国における思想研究の反省——

中 村 元

I

比較思想学会第十七回大会がこのたび東京大学で開かれることになり、まことにおめでとうございます。これだけ立派な学会を盛大に開かれるということは、峰島会長はじめ比較思想学会の役員、会員の方々の多年にわたる並々ならぬ協力・ご尽力のおかげであり、またこのたび本年度の大会が最も古い大学である東京大学において盛大に開かれたことは、前田専学教授はじめ諸教授のご指導のもとに諸職員、さらに学生諸君が協力下さったためであり、慶賀の至りに存じます。

ところで、わたくしは、お祝いを申し上げると同時に、自分の眼を洗い、耳を開いて、「本当かな。夢ではないか」と自分で確かめたい気がいたします。なにか浦島太郎が故国へ帰って、きょ

んとしているような気持ちである。すべてが一新され、立派になっている。(Rip van Winkle)

比較思想学会での、内容の充実した研究は、専ら若い方々が部会で発表し、わたくしは開催校または開催地のために公開講座を行っていた。今度は、学会当局と主催校からやはり「公開講演をせよ」との御依頼である。重荷を感じたが、他の場所ではお受けして、いわば故郷でお受けしないというわけには行かない。そこで、恥さらしをする次第である。

わたくしは昭和一八年から四八年まで、助教授つづいて教授として三〇年間教壇に立たせて頂いた。その間にどうも職責を充分に尽くしえず、また理想をも実現し得ないで、いま回顧すると、慚愧の念に堪えない。そのわたくしが何か意見を述べると言うことはまことに気がひける。「敗軍の將は兵を語らず」という格言

がある。しかしまた懺悔して罪滅ぼしをせねばならぬという念にも促される。そこで、在職中ならん貢献し得なかったことに慚愧して、反省を述べたいと思う。

先般の第二次世界大戦によってわが国の諸方面が反省して新しい出発を行い、めざましい変革がなされた。ところが独り思想の学問の方面だけが変革が遅れている。

アメリカというか連合軍司令部からの強制により、旧制大学が廃止され、新制大学が設立された。それはいろいろ批判されたが或る意味では良いことであつたと思う。国際化することにもなる。しかしその変革の命令に、指導者たちはいいや服従した。制度は変革されたが、研究内容に立ち入ってまでの変革は命令されなかったから、学問研究の内容は一向に変わっていない。

すでに戦前からの思想研究について、アメリカのある哲学教授は批判した。「明治以後今までにあれば多くの哲学教授が外国へ留学して勉強したのに、自分の思想内容を英語で発表し公刊した学者が一人もないではないか」これは日本人による思想研究の国際性の欠如をついているわけではない。

日本の哲学思想は、外国にてんで知られていない。Encyclopaedia Britannica 第十五巻では新たに Japanese Philosophy という論文を掲載することにしたが、執筆者がいないので、わたくしに依頼してきた。期日までに書かねばならぬので、聖徳太子以後の日本哲学をわたくしは大急ぎで執筆した。それほどに日本の思想

は知られていない。日本では戦後に、単に哲学思想の変革がなされていないというだけではない。

明治初期の哲学者達は、その所論は幼稚粗雑であつたとしても、氣宇壮大な心構えがあつた。ところがある時期から思想研究は細分化して、その結果人々に対する指導力を失つたように思われる。かつてロンドン・タイムズ紙が「日露戦争の勝利と共に日本は下り坂になる」と予言して、当時の日本人に非常な衝撃を与えた。しかし学問的規模において、そのころからの日本における思想研究は下り坂になっていゝと言へるのではないだろうか。

日本の大学における思想研究ならびに教育は、(一)研究対象の地域による細分と、(二)人間の精神活動の諸局面の別による細分と、

二重の細分がなされている。その結果「哲学」というものはどの学科でも扱われていない。やつてゐることは、文献学、文献紹介に終わつてゐる傾きがある。日本の大学や学会における学問の細分化は、外国の思想の輸入のためには便利である。しかし独創的な思索は出て来ないという弱点がある。そこで鸚鵡の学問になる。

以下においてわたくしは、思想研究のための学科や専修課程の区別とか、学会の傾向にしばしば言及するが、それは、厳密に言うとうと、昭和四一年までの事情である。昭和三九年から四一年まで、わたくしは東大文学部の文学部長の職に在り、学制改革に微力を尽くした。しかし理想は実現されなかったが、とにかく諸般の事情を知らねばならぬという義務があつた。だから知ろうと努めた。

しかしそれ以後は隠居の身であるから、わたくしの立言は、どこまでもそれ以前の状況にかかわるものであると理解していただきたい。そうして現在、もと東大教授だった方々は太勢おられるが、もと東京帝国大学助教授だった方々は殆どおられない。だから、わたくしの言うことは、骨董品が急に物を言い出したのだとお考え頂きたい。

人間そのものを扱う哲学では、細分は不都合である。

細分すると、同じデカルトでも、*Discours de la methode*, *Essais*, *Meditations de prima philosophia* は哲学科で、*Les passions de l'ame* 「情念論」は倫理学科、美学科で扱え、というのでは統一的な理解はなされ得ない。

スピノーザの名著 *Ethica* は倫理学科のみで扱え、哲学科で扱ってはならぬ、というようなことになる。

カントの『純粋理性批判』は哲学科で講義され、『実践理性批判』は倫理学科で講義され、『判断力批判』は美学科で講義される。それはカントの生体解剖である。そうすると、カント哲学そのものはどこでも研究されていないということになってしまう。

わたくしの在職中インドの留学生が仏教を勉強したいと志願してきた。その志願書の目的記載の欄に「宗教を研究したい」とあったから、宗教学の教授は、「宗教」とあるからには、この学生はおれの方によこせといった。それぞれの学科は、封建時代の「お城」であり、プロフェッサーは「城主」であり、まわりに堀を

めぐらし、「寄らば斬るぞ!」という時代劇さながらの光景であった。

ところが学科の細分化ということは、哲学の重要な問題に解答を与えてくれない。

ヴァイトゲンシュタインは「倫理の諸命題は成立し得ない」という。(ターゼ六・四二)(末木剛博『ヴァイトゲンシュタイン論理哲学論考の研究』I、公論社、昭和五十一年一月、四九六ページ以下) また「倫理と美学(審美)とは一つである」(ターゼ六・四二)ともいう。これに従うならば、哲学や倫理学から区別された美学というものも成立し得なくなる。こういう基本的な問題に日本の大学や学会は答えることができない。

先日イギリスの哲学教授が訪ねて来た。倫理学は哲学科の中で研究講義されている。倫理学は哲学の重要な部分を講義している、という。だから倫理学を除いて哲学は成立しない。ところが日本のやり方は学会において派閥意識を助長する以外の何ものでもない。

哲学科が細かに分かれているのは日本だけの現象である。ドイツでは *Institut für die Philosophie* アメリカでは *Department of Philosophy*。東洋では例えば、フィリピンでも細分化していない。中華人民共和国でも同様である。インドには全国学会として *Indian Council of Philosophical Research* があり、事務局はニューデリーにある (*USO House, 6 Special Institutional Area, New*

Mehrauli Road, New Delhi 110067) が、研究本部はラクノウにある。会長は Dr. D. P. Chattopadhyaya で、研究本部の Director は Roop Kelahe Verma 女史が、Journal of Indian Council of Philosophical Research を刊行している。

インドの大学では、同一人の教授があるときは西洋哲学を講義し、あるときはインド哲学を講義している。そうすれば、おのづから批判的な眼が養成されるはずである。これはアメリカの大学でも採用されている制度である。こういう仕方であれば、わざわざ「比較」ということを言わなくても、おのづから比較による価値批判が行われることになる。

ところが日本ではこれと反対に細分化にともなう現象として、西洋の哲学者を批判しないで、ただ有難がつているというのは、日本の哲学界の顕著な通弊であるといわれているので、敢えて申す次第である。かつて日本の大学では、社会科学といえはマルキシズムを研究することであると思われていた。マルキシズムとは、人類に救いをもたらす唯一の思想であると、大学教授たちは説いていた。現在の東ヨーロッパの激変について、日本の大学教授たちは、何と説明するのであろうか？そして名だたるマルキシズムの学者たちが、仏教の大学で雇われてきた。では学生たちは何を信じたらよいのか？仏教か？マルキシズムか？これは仏教の諸大学当局者の確信の無さを露呈している。——そこから比較思想が出て来ればよいが。

戦後の哲学界にも軽佻浮薄な傾向があった。一時プラトンの国家論がユートピアのようにもてはやされたことがあった。しかしプラトンの空想した国家と、ナチスの全体主義国家とそれだけの違いがあるのだらう。本質的には異ならないのではないか。科学的合理主義を信仰のように尊重している哲学者は、デカルトを絶対視する。しかしおなじく科学的合理主義の立場のラッセルは、デカルトの著作のうち懐疑を述べているところは面白いが、形而上学を説いているところはくだらしないと言っている。日本では戦後にもヘーゲルは偶像視されて来て、その威光は落ちなかった。ヘーゲルを勉強しなかったら日本の哲学科を卒業することはできないであらう。ところがラッセルは、「ヘーゲルの諸学説は殆どすべて誤りであるとわたしはそう信じている」と言う。(『西洋哲学史』下巻、二〇六ページ)ラッセルはヘーゲルの哲学体系を全面的に否定している。「ヘーゲルは、ある事物を他のすべての事物から区別するに充分なことが知られていれば、当の事物のあらゆる性質は論理によって推論できると考えていた。これは誤りであって、この誤りがヘーゲルの体系という堂々たる全建築を生起せしめたのである」(市井訳、ラッセル前掲書、二二二ページ)。

ラッセルの評言ばかり引用しすぎたと言われるかもしれないが、世界諸国を通じてヘーゲルよりもラッセルのほうが圧倒的に多く読まれていることは明白な事実である。ところが日本の哲学者たちは、ご教祖さま一辺倒なのである。ヘーゲルは地球上における

精神の発展において、最高の役割をドイツ人に賦与している。

(ラッセル前掲書、二二三ページ)プロイセンを中心とする国家が最高の国家であるとする、では日本はどうなるのだろうか。われわれ日本人は日本のことを考えなくてよい、ということになる。そういう哲学説を日本の哲学者たちは有難がっていたのである。のみならず、ヘーゲルの思想は危険でさえある。かれの国家主義は、残忍さと国際的強奪行為を正当化する傾きがあった。この傾向はヘーゲルの影響を受けて史的唯物論を国是としている若干の大国が今日なお少数民族に対してとっている態度に見られる。日本のヘーゲル主義者たちは、これをさえも是認しようとするのである。うか?「日本にはヘーゲルの化石があるよ」といってアメリカの哲学者たちは笑っているが、日本の哲学者たちはそれに気がつかない。ただ日本の哲学者に一貫して見られる傾向は、西洋の哲学者たちの鸚鵡となることであると言つてよいかもしれないが、鸚鵡には思考能力があるかどうか良く解らないから、西洋哲学者の奴隸となることであると言つたらよいのであろう。そしてかれらの言説の難解であることに随喜の涙をながしている。経典や哲学書が難しいのはJargon(隠語)だと思えばよい。解つた部分だけが生活に生きていて、指導力を發揮しているのである。その他の、解らない部分は死んでいるのである。エビクテートスはもと奴隸であったが、自由な思索者としてストア哲学の独自の思想を展開した。ゴーサーラは、奴隸であったが、主人のもとから逃げ出し

たときに衣を奪われ、それ以後裸で通したというが、かれは独自の運命論・必然論を説いていた。かれらは奴隸であっても自由な思索を展開した。ところが日本の哲学者たちは、身分は自由であっても、奴隸的思考に明け暮れていたのではないか。

では東洋思想の研究のほうではどうであったかという、けっきょく昔の人々の言つたことをパラフレーズしているだけではなかったか?そこには価値批判が行われなくて、研究者自身の思想や確信とは無関係にただ古典の思想が述べられていただけではなかったか。殊に仏教研究の場合には「何々宗ではどう説く」ということを並列して、以て能事終われりとしていた傾向があった。だから日本の哲学あるいは哲学的諸学問というものが、外国に対して発言権をもっていなかった。自分の活動範囲を狭く限って、その範囲のなかでうごめいていたら、めざましい思索が出てこないのは当然である。

どうしてこんなことになったのか?

日本では文部省の権力が強く、嚴重な支配統制を行ってきた。東京帝国大学は講座制をとっていたが、それは一八九三年(明治二六年)に始まる。そうして他の諸大学もそのパターンに則つて設立された。或る哲学教授の言われたことであるが、他の大学を設立する場合に、東京帝国大学の学科分類のしかたに則っていないならば、文部省が設立を許可しなかった。日本の哲学研究における奇異なる形態が成立したのだという。そうだとすると、日

本の思想研究のありかたが、〈奴隷の学問〉であって、獨創性を無くしてしまった元凶は、文部省と東京帝国大学であったということになる。(ただし現在の東京大学ではない。)この「専門」の強調は、初期東京大学の教授たちの専門活動を狭くした。帝国大学への講座制の導入、「専門」の強調は、伊藤博文がドイツの宰相ビスマルクから教わってきた大学対策であった。伊藤博文は、この呪文を唱えることで官立大学教授たちから政治的関心を奪ったのだという。これは故木村毅が尾崎号堂の縁辺からの聞き取りをもとに立てた結論である。(『早稲田外史』一九六四年、講談社)「この information は、寺崎昌男氏の「講座制——それはどのようににはじまったか」による」冗談めかして言えば、アジア大陸の諸帝王の官廷の宦官の制度に対応するものが講座制であったのである(！)。けっきょくわが国で縄張り意識の強いのは、世間の人々のいうところでは、「お役所とヤクザと国立大学」ということになってしまった。

なぜ日本における思想研究をダメにしたと言えるかというと、諸外国に対する影響が絶無に近かったということである。その証拠としてアメリカの Paul Arthur Schlip 教授が *Living Philosophers* の叢書を計画したときに、だれか一人くらいは東洋の哲学者を取り上げるべきだとの意見が起ったが、編集委員一同が一致して推したのは S. Radhakrishnan であった。その他のアジアの哲学者のことは誰も知らなかったという。

II

ところが明治初期の哲学先駆者たちは、こういう精神分裂症的傾向は見られなかった。気宇壮大であった。「哲学」という語は、西周(一八二九—一八九七)に始まるといわれているから、先ずかれの言に聞いて見よう。

西周は単なる啓蒙思想家ではない。独自のものをもっていた。西周は津和野藩の人であったが、一八六一年(文久一年)に幕府からアメリカ留学の内命を受けたが、南北戦争のため留学先をオランダに変更し、三年あまりオランダに留学した。幕府ならびに明治政府に仕えたが、傍ら私塾を開いて講義し、自分の思想を形成した。彼が自分の私塾で講義した「百学連環」とは *Encyclopaedia* の訳語である。かれはそれらの諸学を講ずるとともに、「百学の学」(*Science of sciences*)として「統一の観」を立てる哲学と諸学との関連を示した。「百一新論」というのは名前は有名であるが、その趣旨は、世の中に沢山の学問があるがそれらは無意義に成り立っているものではない。基づくものに基づいて成立しているのである。それを統合する哲学というものがある。百の学問を统一到一する新しい学問である。これは単にコントの哲学とも違う。西周は弘法大師を読んだことは無いだろうが、あの考え方は「十住心論」につながるものである。

つづいて西村茂樹(一八二八—一九〇二)も影響力の大きかった

思想家であるが、かれの有名な『日本道德論』は、「明治一九年二月、余が帝国大学の講義室にて演説せし所の稿本なり」とその端書きにしている。現在東大の名誉教授であり、もと倫理学の主任教授であった古川哲史博士は『泊翁 西村茂樹 転換期日本の大思想家』（文化総合出版、昭和五一年）という書を著し、同書のうち「泊翁佳言」（二〇四―二〇六ページ）という部分は、「著者自身の倫理観を披露したようなところもあるが、それは泊翁の言説をもとにした一種の倫理学概説の試みとうけとっていただきたい」（はしがき）と言っておられる。

西村茂樹は、外国留学の希望をもっていたが、ついにその機会を得ず、自学自修により、また日本人の先輩および日本に来ていた外人について外国語を学んだ。かれは明治政府に仕えたが、かたわら旧藩主堀田正倫の邸内に自修学舎を開き、学課はシナ学・イギリス学・ゲルマン学の三つであったが、これらの学課（学科のこと）を西村一人で教えていた。当時のことだから、かれはオランダ語・英語・ドイツ語をこなしていた。「当時の私塾で、ひとりで外国語の三学専修はめずらしかった」といわれる。（高橋昌郎『西村茂樹』吉川弘文館、昭和六二年、二五ページ）西村は洋学者であったが、同時に日本主義者であった。かれは西洋の道德を評価するがゆえに、ますます日本の道德を意識し、発掘し開発しなければならぬと考えた点に、思想家としての特性がある。西洋化はぜひ進めねばならぬが、それを日本の伝統のうちにいかに位置づ

けるかという問題に最初にとり組んだ思想家である。かれはひろく東西の諸国の文明の栄枯盛衰のあとを見究めて、日本の進むべき道を模索している。

かれは、「日本中等以上の人士は道德の根柢を失い」と嘆き、「世界何れの国に於いても、或は世教或は外教を以て道德を維持せざる者なきに、我国独り道德の標準となる者を忘失したればなり」（岩波文庫版『日本道德論』一二ページ）と批評している。まるで、それからの百年後の現代のことを言い当てているようであるが、かれの所論は他の諸外国との比較反省にもとづいている。明治二〇年に哲学会がここ（東京帝国大学）でつくられたが、その時かれは「哲学会に対する質疑」（『西村茂樹全集』第二巻、明治四二年五月、昭和五一年八月復刻、思文閣、一八九一―一九六ページ）という文書を提出している。要点は、西洋の哲学を是非勉強しなければならぬ。東洋哲学ということがいわれるが、仏教や儒教は西洋的意味の哲学を欠いている。だが「西洋の諸大家が数千年の間研究考察したる所の真理は、固より廣大精微を極めたる者なるべしといえども、東洋諸大家が著書の中に亦烏んぞ西洋人が未だ発見せざる所の真理を藏せざることを知られ（む？）や」、「而して二家（儒教・仏教／筆者注）の書中には許多の真理を包含すること、大氣中に許多の酸素を包含するが如き者あらん」として西洋哲学だけできつていくややかたに反対している。「東西の学に通じたるの後、諸賢が自ら信ずるところは儒教仏教の上にありとも、出でて本会

に臨みたる時は純然たる哲学士の心持となり、自己の教義を主張せんとか自己の教祖を尊重せんとか、他の教義を攻撃せんとか云える念慮は全く掃い去り、同心協力して哲学上の真理を考究せんことをのぞむなり」、「学問を為すに唯古人の足跡のみを履むは学問の本意殊に哲学の本意に非ず、西洋人何程聡明なりといえども決して鬼神の如く畏るべき者に非ず、又東洋人は西洋人と其学問知識の源を異にするを以て、哲学の事実中或は東洋にのみありて西洋に無き者あるやも計り難し、此の如き者を発見して哲学の範圍を広め、又は旧哲学に新思想を生ぜしむる事あらば、吾等東洋に在りて哲学を修むる者が此学に対しての名譽なるべし」と述べる。

またかれは思索のみならず実践が必要であると説く。「道德のことは学問というものと実行というものがあつて、道德家ということになるのは学問と実行との二つを兼ねなければ道德家と云う事はできない。」（弘道会松江支会演説（明治三〇年）『西村茂樹全集』第二巻、明治四二年五月、昭和五年八月復刻、思文閣、一一一七ページ）「其の道德を学と云うには儒教・哲学・神道・仏教・耶蘇教の外には道を得るものとは無いのである。何れも此本から取らなければならぬ事になるのである。……神道なり、仏教なり、耶蘇教なりは教の名である。（一一一八ページ）だから伝統に対しても批判的でないければならない。『儒教も昔の儘では居られない。西洋の哲学と云うものは儒教に較べて見ると実に精密のものであります。併

乍矢張り名の如く研究することから考察することが余程深いのでありまして、実行に至っては迂遠なものである。哲学者にしても品行の宜しからざる人も少なからぬことであります。（一二二ページ）このような主旨でかれは述べているが、比較をもつて述べているのである。

ところが近年はどうなったか。西洋の解釈なり思想を有難がつている傾向は近年まで続いていた。東洋のことがらを研究するにも、西洋の研究方法を適用するということに主眼がおかれていた。西洋人の思维方法も、地球全体の上から見ると所詮 local なものであるという反省が忘れられていたような気がする。

III

では今後どうあるべきであるか？

哲学的諸学問の間の区分を今改めて吟味すべき時期に到達している。日本の学問は新カント派的価値分裂症に陥っている。それと同時に地域による哲学の分類ということは、だんだんと意義をもたなくなっている。わたくしの学生のころには現象学は独逸学派に含められていた。しかし現在、現象学の影響は、むしろフランスに顕著であり、フランスの哲学者を通しての影響が日本で顕著であり、インドにさえも認められる。リーダークリシュナン百年祭が一九八九年二月一四日にインドの大統領官邸で開催された（Birth Centenary of D. S. Radhakrishnan）そのとき J. N. Mohanty

(Temple University) は、インド哲学というものは有り得ない、と主張した。それは戦時中のナチス数学なるものが荒唐無稽であったのと同じであるという。わが国における日本法理学の論争が思いつく出される。アメリカのエリオット・ドイチュ (Eliot Deutsch) 教授や Daya Krishna 博士 (Jaipur 大学 Vice-Chancellor) の同趣旨の発言を最後の総会において紹介した。この発言は日本人の学者にとっては shocking であろう。そして shocking であるということは、日本の学者が哲学をやらないうで文献学ばかりやっているということを証明する。

ライブニッツはどここの国の人であるか？ かれはラテン語とフランス語とで書いた。しかし Ziefersachsen 州の首相 Dr. Albrecht は、「ハンノーヴァーはライブニッツの都である」という。誇りを持っているのである。最近ライブニッツ研究が急に盛んになってきた。しかしそれは主として未出版、あるいは未翻訳のテクストを問題とし取り上げているのであって、かれの思想の中核を衝いているのは、むしろわが日本の村上俊江と土田杏村ではなからうかともに華嚴哲学と対比している。(西洋人の学者がライブニッツを問題とする場合には、同じ思想的伝統の中で論議するのだからその所論は tautology になる危険性もある。しかし日本人であるこの二人は、異質的な伝統をうけて物を言っているのです。つまり人類の思想に普遍的なものを突きとめているのである。) もしも両哲学の特徴の区別を簡単に言うと、ライブニッツは differentia-

tion を強調し、これにたいして華嚴哲学は integration のほうに注目していると言えよう。

村上俊江の論文は川田熊太郎監修の『華嚴思想』のなかにてでている。(村上俊江「ライブニッツと華嚴宗」川田熊太郎監修・中村元編集『華嚴思想』法蔵館、昭和三五年二月、四五三—四八三ページ) これは東大での卒業論文であった。(明治二九年七月、東京帝国大学文科大学の卒業論文、土田杏村の「象徴の哲学」は何度か刊行されたが(最近では昭和四六年一月『象徴の哲学』付、華嚴哲学小論改訂解説上木敏郎、全国書房「名著の復刻」の一冊)、これも東京大学での卒業論文である。

昭和時代の東京帝国大学であつたら、村上や土田のような論文では、とても卒業させてくれなかったであろう。かれらはここで「比較」ということを言わないが、それ自身比較である。比較の上に価値批判を含んでいる。日本では華嚴経の研究は非常に多くなされているのに、この経典から激発されたという思想家は日本には殆どいない。華嚴経の六〇巻本と八〇巻本との差異とか、なになに菩薩が夜摩天宮で何を言ったとか、というような事をいくらか論議してみても、そこから新しい思想は出てこない。だが民間にはこういう先駆者がいたが、ただ日本の大学では、東京大学でも「比較思想」ということを口にする人がいなかった。

そのわけは、比較思想という試みに敵意を以て対立していた人が、昔の東大の教授に非常に多かった。もちろんそれと同時に、強力な支えを与えて下さった方々も元東大教授の中に幾人もおら

れた。東大が過去の学会において大きな位置を占めていたから、両方の学者がいたということは、考えてみれば当然であろう。そういう事情だから、わたくしは東大の現役教授や学生諸君や先輩にたいして、絶対必要の場合でなければ「比較思想学会」のことを口にできなかった。そのわけは、学会の大家たちが比較思想ということ嫌っているのに、そんな色がつくのはご迷惑だと思ったからである。では、なぜ嫌われたのか？ 東大ではそのころ学科が細かに分かれてセクシヨナリズムをとっていたからである。「東大では」という場合に、わたくしは、昭和三十九年から四一年まで、およびそれ以前のことをいう。その後のことは知らぬ。

セクシヨナリズムを打破しようとの動きは、昭和三十六年ころから起こり、中島文雄、手塚富雄両文学部長のころに実施された。わたくしはその後を受けて遂行したのである。その趣旨は広い教養と見識をつけさせようということである。哲学関係の諸学科が細分化されたことについて、岩崎武雄教授と赤塚忠教授とのやりとりがあった。これは、わたくしだけが知っている事実であり、ひとり胸におさめて墓場へもって行くかと思っていたが、学問のために公表したほうが良いと思い、敢えて公表する次第である。東大の文学部長室に、この両教授とわたくしが要談をしていた。話が終わってから、昔、哲学会でも先輩の方々がこのように顔を合わせることもあったが、このごろはなくなった、という話が出たときに、赤塚忠教授が「岩崎さん！ あなたがわれわれを追い

出したんですよ！」と一言ズバリといった。あの温厚な君子であった赤塚教授が、こんな手厳しいことを言うのかと思つて驚いた。岩崎氏は「そんなことありませんよ！」と苦笑しながら否定した。これについての批判はのちの方々にお願いしたい。

岩崎哲学についての批評は簡単にはできない。ただ東大の物理学教授で先輩であった山内恭彦博士の寸言は、客観的な批評として若干人数の会合で述べられたことがありこれを紹介しておこう。山内博士は、自著のなかで公に書いておられる。「物理学者が年をとると、道は三つしかない。①学術行政家になるか、②哲学を勉強するか、③何もしないか、である。自分は①も③も嫌いだ。だから哲学を勉強するのだ」といって、哲学を勉強し、仏教のころには非常に熱心であった。その山内さんの寸言は、「岩崎さんは、哲学といえは、ギリシア以来の伝統を受けているものだけに限る、と考えておるので、……」であった。これも日本の哲学思想史における一つの重要な見解であるとともにまた批判であると思うので、ここに紹介しておく。

諸の専攻課程の障壁をなくしようという動きが高まって、わたくしは押されて文学部長となった。自分でも何かせねばならぬ。そこで比較思想の講義をすることに決定した。しかし「比較思想」とか「比較哲学」とかいう名称をもち出すと、袋叩きに会うおそれがある。そこで昭和三十九年四月に夏学期の講義として「特殊講義 思想史における問題設定」として毎週二時間、二単位と

し、備考に「印度哲学史および宗教学・宗教史学専修課程の単位となすことを得」とした。つづいて昭和四〇年四月に統講として、同じ条件で夏学期に講義を行った。昭和四一年四月には四単位で一年を通して同じ趣旨の講義を行った。その後は記録がはっきりしないが、三枝充恵氏に比較哲学の講義をしてもらった記憶がある。同氏は「比較思想論」ということをはっきり明示し、聴講者も多かったと聞いている。

こういうことを体験し記憶しているわたくしとしては、今日こんなに大っぴらに、堂々と、盛大に、比較思想学会が東大で開かれたというのは、全く別世界の出来事のようにしか思われないのである。東大での発起人の委員の方々のお名前の中に旧知の方々がおられるのを発見すると、何とも言えずおなつかしい。また未知の方々のお名前を発見すると、未来へ向かつての新しい動きのたのしさをかんじる。諸教授のあいだのinterplayあるいは協力がよく出来ているという点で、このたびの学術大会は大成功である。それは中心となった前田教授の見識と指導力が物を言い、また東大の諸教授がそれぞれの立場から協力されたことである。これは大変な変化である。

比較思想は、人間の将来における自覚的实践のため極めて重要である。例えば、カント哲学によると、「靈魂の不滅」ということは、一つの形而上学的理念であり、理論理性によっては証明され得ないものであるとして、『純粹理性批判』の「先驗的弁証論」

においては否定してしまったが、しかし実践的立場から肯定されるものだとした。それは認識の対象となり得るものではなくて、実践理性の要請(Practical)の一つであるとした。この議論を当然のものとして一般の知識人は疑うことをしない。ところがインドの若干の思想家によると、靈魂不滅の論は道徳を破壊することになる。身体は殺され斬られてもアトマンは残るということになる。祭祀において犠牲として殺された鳥・獣が来世にはよき状態に生まれかわり、またこれを実行した人が来世に幸福を受けるということは正当バラモン教の主張するところである。(例えば『マヌ法典』五・三九・四〇・四二、『ウイシヌ法典』五一・六一以下。なお『ヨীগシャーストラ』二一三三以下。中村元『初期のヴェーダーンタ哲学』二一五ページ)つまり靈魂(アトマン)が不滅であるならば、相手を殺してもかまわぬことになる。この両論の対立を認めた上で、人間ないし生けるもの(有情)の、より高き立場からの構造的把握が必要となるであろう。比較思想がこの道を開くことになる。

このごろ世間では「学際的」ということがもてはやされているが、それは不十分であると思う。「学際的」というときには既製の学問領域や学問体系を認めた上で、両者に関係することを言うところが、われわれは既製の学問の体系を吟味して、根本から建て直す必要がある。それが比較思想学会の任務である。比較思想の研究は、従来の専門家の研究を軽んずることになるのではないかと懸念されるかもしれないが、事実には正反対である。専門家の

研究を新たに意味づけるのである。わたくしの学生時代に和辻哲郎先生が「日本倫理思想史」の演習で言われた。「専門家は未発見の材料を何か見つけると、まるで鬼の首をとったように得意になってそれを紹介することに務める。しかし、人々が読み古した古典の中から新しい意義あるものを発掘せよ」と。例えば『徒然草』とか『奥の細道』のようなものは、皆が読んでいる。それなのに読み古されているものの中から何か新しいことを発掘するためには、眼光紙背に徹する見識を要する。それは比較思想の素養によってのみ可能となるのである。

今やわれわれはかつて人類が経験したことのない大きな変動にさらされている。近代文明は、自然科学的研究の進歩と機械使用の技術の開発によって、年とともに発展し、未来は常に明るく、美しく、楽しく想像され映写されていた。ところが現在ではもはやそういう安易な世界観は許されなくなった。人間の生存自体が脅かされている。ところが、人間の行動を指導し規制するはずの思想の面では、そのような危機に対する対応の準備ができているであろうか？ 初等教育から大学に至るまで、思想は種々のかたちで教えられているが、その内容は西洋近世初期以来の安易なオプティミズムではないか！ 一般社会人の常識的見解も、その路線を越えていない。そこには進歩に対する無反省な信仰が支配している。

今や世界は一つになりつつあり、個々の国家権力は地球志向的立場からの種々の制約を受けざるを得ないことになった。われわれはみな宇宙船地球号の乗員なのである。ところが思想面における対応は、何とものろろして間の抜けていることだろう。学会では昔の哲学や宗教の典籍をただ有難がって訓詁注釈しているだけではないか。一般ジャーナリズムはただ西洋人の評言を鵜呑みにして伝えている傾向がないだろうか。そこには価値批判がなされていない。

近代文明は実際問題として、ヨーロッパ諸民族、つづいて北アメリカの国々が、他の民族を支配し略奪することに始まったといえるかもしれない。それは強大な武力・経済力を背景とした国家権力の一方的拡張であった。第二次大戦前の日本も、それを模倣していたとして非難されている。しかし今日ではもはやゆるぎがない。この激変する状況においては、われわれは過去からの諸の思想的伝承について新たに反省して、進路を見究める必要がある。「比較思想」はまさにこの至上の目的をめざしているのである。いま比較思想学会がこういう大きなものとなって発展していることは未来に向かって非常に明るいものを感じる。

そういう意味で、本日の比較思想学会の学術大会は、日本が新時代の学問を創造し、新しい文明の基礎を築くための出初め式であり、門出であると言えよう。まことにおめでとうございます。

(なかむら・はじめ、インド哲学・仏教学、名誉会長)